
しんちゃん&ジョジョの奇妙な冒険 ハリケーンを呼ぶ綱玉の示す路（ロード） 除夜のささや

パタ百ハイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレヨンしんちゃん&ジョジョの奇妙な冒険 ハリケーンを呼ぶ
綱玉の示す路ローテ 除夜のささやかな願い

【Nコード】

N8719P

【作者名】

パタ百八イ

【あらすじ】

中学生も幕引きに近い15歳の正月に、学校で親しくしてもらった友達と義母と共に、初詣に出掛けた除夜。そこで彼が祈るのは……

注、この話の時間軸は『クレヨンしんちゃん&ジョジョの奇妙な冒険 ハリケーンを呼ぶ綱玉の示す路ローテ』が始まる数ヶ月前です。

前編 全員集合、そして出発！（前書き）

中学時代、俺は今まで得られなかった、いや、得る事を拒んでいたものを手にした

楽しい思い出ばかりじゃなかったけど、その時代の思い出の全ては俺にとって掛け替えのない宝となった……

だから俺は、その宝と一緒に作ってくれたみんなには、本当に感謝している……

前編 全員集合、そして出発！

一月二日。新年を迎えて二日目

春日部のある神社の近くの公園で、学生服を着こなした背の高い金髪少年がベンチに座り込んで暖かいお茶を飲みながら、中学生程の容姿の、否、中学生程にしか見えない容姿の女の子？が長い滑り台に滑ってはしゃいでいるのを見ていた

「ねーねー除夜君、除夜君も一緒に滑ろうよ。ただ待ってるだけじゃ退屈でしょ？」

「悪いが俺はこれから友達と初詣をするというのに公園で遊んでその為の体力を消費したくないんだ？」

俺がそういうと、滑り台の階段を上っている途中に俺に素敵なお誘いをした少女（笑）を一蹴した

俺の返事を聞いた少女（笑）は、顔を俯け、嘆息をついた

「昔は何処に行くにも何をするにもあたしについて来ていたのに…
…中学に入ってから冷たくなったね」

「今年高校受験を控えたばかりでまだ義務教育課程を修了していないガキだけどさ、15歳になって義理の母と一緒に滑り台を滑るっ

てのは……いや、実母でもだけど」

「子供って親許から離れるの早いよね。物理的にも心にも……」

俺の名前は瀬上除夜。三月に高校受験を控えた、一中学生である

そして滑り台の上で落ち込んでいるのは俺の物心つく前からの付き合いの、俺の血の繋がっていない母親だ。容姿は中学生程だが、実年齢は自称53歳である。因みに昔から容姿は大した変化が見られない

今日俺達がここにいるのは、先程述べたように俺の友達と一緒に初詣をする為だ

受験が近くなって十月辺りからみんなで遊ぶというのが余り無くなったので、この若々しい義母さんが企画してくれたのだ。『勉強も大事だけど正月くらいは受験の事は忘れて息抜きはしようよ』というのが彼女の言い分だ

ごもつともな理屈ではあるが、実際はそれを口実に人を集めて楽しみたいのだろう。彼女はこういう人だ。それはこれから集まるメンバーは皆知っている。皆それが分かかって来るのだから、皆いい人だと思う

もつとも、今日という日を一番楽しみにしていたのは多分俺だったのだろう。何しろこの時期でも時たま遊ぶ同学年の面子の他に、俺が世話になった先輩に俺を慕う後輩も皆集まるのだから

そうこうしている内に俺達へと近寄る足音が聞こえてきた

「除夜、明けましておめでとう！」

「明けましておめでとう瀬上君」

「ああ、今年も宜しくな優太、宝来」

短い茶髪に中性的な顔立ちの、俺同様学生服を着こなした俺より頭二つ分小さい沢登優太と、黒のショートカットでルックスの良い、また同じ様に制服を着てきた宝来瑪瑙が二人で来た

優太は義母経由で知り合った、俺の幼馴染みで唯一の親友、宝来は俺の事を何時も気にかけてくれる俺の中学に入ってから友人だ

「おはよう瀬上、沢登、宝来、そして明けましておめでとう！」

裾の長い学ランを一番上のボタン以外は全て外し、蜥蜴皮の模様のネクタイをしめた、薄いエメラルドグリーンの髪に紫色の目をした男が俺達に挨拶してきた

名前は本荘信朗。妙なこだわりを沢山持つ俺の友達だ

「明けましておめでとう。で本荘、お前何で二回も挨拶するんだよ。」

『おはよう』に『明けましておめでとう』と」

「特別な行事の日は最初は普通のその時間帯に相応しい挨拶を、そして行事に合った挨拶をするのが俺のこだわりだ」

「好きにしる……」

「瀬上君に瑪瑙ちゃん達、あけおめ！」

黒髪にシルバーのヘアピンをつけ、冷え込むというのに臍が露出するように四角に切り取り、肩から袖にかけて青いフリルをつけた制服に、膝上十センチ程のスカートに水色のハイソックスを履いた少女が手を振ってこつちに来た

古賀幸。宝来達同様俺の同級生で数少ない俺の友人の一人だ

「あっお兄さん、優太君、明けましておめでとう」

「明けましておめでとう瀬上、沢登、宝来、本荘、古賀。今年も宜しくな」

長めの白髪に平均よりやや低めの身長、黄色のバイザーをつけ、首に太い鎖を巻き、皮革のブーツを穿いた少年と、晴れ着を来た、長い白髪を赤いリボンで纏め、金色の瞳の女が来た。少年の方は俺を見るや抱き付いてきてすり寄ってきた

少年の方は比留川勝海。俺の事を兄のように慕ってくれる、俺にと

つても弟のような存在だ。実際に二つ年下だし。晴れ着姿の女はこいつの実姉である比留川純恵^{ひるかわ すみえ}。俺と同年で俺の友人だ。厳格そうな口調をしているが、一旦たかが外れれば止まる事を知らない。まあこうなるのは余程の事で、普段は礼儀正しく、律儀な奴だ

「どうした瀬上？」

「いや、お前の晴れ着姿って新鮮だからな」

「折角の正月で来年度には高校生になるからという事で……お母さんに着せられた」

まあその姿は普通だと思う。少なくとも制服の俺達よりは違和感を感じられない

「えっと後着てないのは……」

「俺たちはたつた今来たぞ！」

赤みがかった茶髪を横に蟹の足のようにセットし、ややつり上がった目、ワイシャツの上に黄色く背中に「銚子」と書かれた法被を羽織り、紺色の長いスカートの下に男子用の制服を着たスタイルの良い女の人が駆け込んできた

「元気そうで何よりです。部長」

「何言ってるんだよ瀬上、俺っちはもう卒業したんだって、先輩でいいよ」

中々豪快なこの女の人は室伏藍那先輩。俺達とは学年が一つ上の俺達の学校のOG。俺と優太、宝来の本命校である県立星陵高校の生徒でもある。よって合格すれば、引き続き俺達とは先輩後輩の間柄となる

『部長』と呼んだのは、俺の所属していた陸上部の部長だったからだ。余談であるが彼女が一年の頃部員が集まらなかった為同好会として結成し、一年後当時の一年が三人入って、俺を半強制的に引きずり込んで部活動に認定させた

強引な人ではあるが面倒見はよく、気遣いは(ずれてはいるが)してくれている為嫌いではない

「明けましておめでとう。瀬上君、みんな」

右サイドにハイビスカスの髪飾りを付けた、長い茶髪を後ろに棚引かせ、襟や袖をギザギザにしたセーラー服に、足首まで隠す紺色のロングスカート、そして下駄を履いた人形のように整った顔をした、俺の先輩が駆け寄ってきた

清水赤穂先輩。俺の一つ上の先輩で、俺の所属していた調理部の元部長

因みに、こんな服装をしていて顔立ちも女の子みたいで、声も高く喉仏もなく、胸も相応にあるが、男性である。何でも生まれつき女性ホルモンの分泌が普通の男性より活発な為らしい

この様な格好をしているのは純粹な趣味だが、性同一障害ではなく、男性としての自覚もある

軽く挨拶をすると、今度は短く切り揃えた黒髪に遠視用の眼鏡をかけ、ズボンの中にワイシャツだけでなくブレザー服も入れ、袖やズボンの裾に蛍光テープを巻き、胸ポケットに反射板をつけている男性が近寄ってきた

俺の二つ上の先輩である松任朝熊先輩だ

「す……すみません、先輩、お……遅れてしまったみたい……痛っ
！」

「姉貴……思いつ切り舌噛んだな……」

「っ……」

やや色素の薄い黒髪に頭に大きなりボンを蝶結びにした、両肩に十字架を模した肩当てをし、右胸にカメレオンの頭部を模したブローチをつけた紅い瞳の少女と、少女と似た顔立ちの、同様に薄めの黒髪を肩甲骨までストレートに伸ばし先端をヒョウ柄のリボンで縛った、ネズミを模したブローチを左胸につけた、蒼い瞳の少女がいた

紅い瞳の少女は痛そうに口元を押さえている

紅い瞳の少女は國本真緒くにもとまお、蒼い瞳の少女は美緒みお、真緒の方は一学年下、美緒の方は二学年下の俺の後輩

性格は真緒のは大人しくて若干おつちよこちよい、美緒のは男勝りだ

「後来てないのは三谷先輩だけみたいだな」

「まあ時間まで後五分あるんだ。待っていよう。それは時間より先に来た奴のやる事だ」

二分後

「あはははは、もう雁首揃えてしまっているみたいだね諸君」

「ああ、お前がビリだぞ三谷。まあ時間前に来たんだから咎める筋は無いがな」

「いやーごめん。身支度に時間かかっちゃって……みんなの中学時代最後の正月は僕の素晴らしさで締めをくりたいからね」

あははという、かなり美形の、そこらのビジュアル系タレントにも

負けない顔立ちをした、麦わら帽子に朝顔の花がプリントされた学ラン、そして白の地に雪の結晶が水色の糸で刺繍された長ズボンに草鞋を履いた、俺と同じ年の俺の友人が姿を現した

名前は三谷廉三郎^{みたにれんさぶろう}。俺の友人

性格はナルシズムが入っており、協調を乱す事はないが結構我儘で一番俺を苛つかせていたが、割と嫌いになれない奴だ

三谷が全員に新年の挨拶をすると、義母さんは手をパツツと叩いた

「よし、じゃあ全員揃った所で初詣に行きますか！」

「そうだな」

私についてきなさい！ - -と言わんばかりに張り切る義母さんを先頭に、俺達は目的地である神社へと足を進めた

「そう言えば義母さん。俺あんたが『あたしが準備してあげる』つつったから金小銭何枚かしか持ってきてないんだが大丈夫か？」

「心配いらないよ。あたしが人数分のお金用意してるから。それと優太君達のお年玉も用意してあるから終わったら渡すね」

その台詞を聞いて少し騒がしかった宝来達は押し黙った

何を考えているのかは分かる。この義母からお年玉を貰うのに、戸惑いを感じているのだ

小さい頃から貰っている俺や優太は何の抵抗もない。一昨年から貰っている宝来達や先輩方は多少は慣れている

一番戸惑っているのは今年転校してきた國本姉妹でまず間違い無い動揺の理由は分かる。義母さんは自称53歳だが、外見は俺より少し下だ。そんな人からお年玉を貰うのだから、健常者なら差違はあれど抵抗を覚えるだろう

「嬉しくないの？」

涙目になってる……

「嬉しいよ。取り敢えず無駄話してないで神社行こう」

何とかこの話題を終わらせ、俺達は神社へ向かった

前編 全員集合、そして出発！（後書き）

瀬上家の年越しそば

白ネギを刻んだものと揚げ玉をたっぷり乗せ、それに海老天と蒲鉾を入れたそば

除夜「俺はこれに黄身を入れるのが好きです」

「あたしは餅を入れるのが好きです」

後編 俺の願い事（前書き）

俺の願いは、物凄く下らなくて、物凄く大それた願い……

後編 俺の願い事

神社に辿り着いた俺達は、まず義母さんの指示で前もってトイレに行くよう言われたのでそうしていた

義母さんは意外とイベント事を仕切るのが大好きな人で、細かい事に結構五月蠅く、従わなかったら怒る。とは言え、大抵の指示は間違っていないので、基本的には従う

「それにしても人多いね……はぐれたらどうしようか……」

勝海が人混みを眺め、もっともな心配事を言う

間違っていない。御存知の通り三が日は初詣に神社に参拝に来る客が多い。この神社は参拝客は少ないが、それでも集まる事は集まる

「心配無用。こんな事もあるのかと、人数分のトランシーバーを用意しておきました！」

意気揚々とバックからトランシーバーを取り出す。何でトランシーバーなんだろう。今の御時世携帯電話という物があるのに……

「だって携帯電話じゃ雰囲気出ないし」

「何のだよ」

てか人の心の中読めるのかあんたは……

半分呆れながら、俺達はトランシーバーを受け取った

「初詣と言えばまずおみくじ！」と、張り切って俺達を導く義母さんに引つ張られ、俺達はそこへ向かった

「あ」

「あ」

そこで、思いも寄らぬ人物に遭遇した。黒髪にプラグのような髪留めを左右につけた、白衣にネクタイに長靴の女性がいた

俺達の元担任の、栢下千晶先生だ。大学までの教員免許は一通り持っている為、教師不足の星陵高校に転任となった

「ああ瀬上達、明けましておめでとう。正月に初詣とは、見上げた心意気だな……どうした？人をジロジロ見て」

「すみません。先生高校に転任してお洒落に氣遣つようになりましたか？」

「なしてね」

「いや、白衣がピシッとしているから……」

「いやそれお洒落の内に入らないから。幾ら私でも年末年始くらいはちゃんとした服を着て過ごしたいって気持ちはあるから」

それだつたらもっとそれらしい恰好をしるよと俺は思った

この人は一年中この様な恰好で、身だしなみに興味がなくヨレヨレの白衣のまま普通で普通に教壇に立って生徒に教えていた。今の発言から、恐らくそれに変化はないだろう

閑話休題

先生と義母さんは月並みの挨拶を交わし、初対面である國本姉妹を紹介した

「先生も初詣に？」

「まあね……一応日本人として正月と盆はらしくしてる。あっそうだ。せつかく会ったんだ。君達にお年玉を上げよう」

財布を取り出して中身を確認し、一人につき五円玉を一枚ずつ渡した

『……………これは？』

「五円玉」

いや、見れば分かる。俺は物心ついた時から日本で暮らしてきたから現在日本で流通している貨幣は全て把握している

俺が聞きたいのは、『ここで五円玉が出て来た理由』だ

「いい御縁がありますようにって意味。大体仮にも教師が生徒に大金渡せる訳ないでしょ。それも小学生じゃなくて中学生も終わりかけの」

はい、ごもつともです

何で俺の知り合いは変な所しっかりしている人が多いんだろう？

取り敢えず、俺達はおみくじの中身を見た

宝来と三谷、本荘と先生は中吉、優太と勝海、義母さんと清水先輩は大吉、比留川と美緒は凶、古賀と室伏先輩、松任先輩と真緒は小吉

そんで、俺はというと

「あははは、除夜君こんなので本気になって怒ったら駄目だよ」

義母さん、俺はこれに憤慨以外の気持ちは浮かばないよ……

「ある意味…… 本当にある意味だけど、貴重な体験だね」

間違っていないよ優太。お前の言った通り望んだって出来ない体験だよ

他のみんなも、大体がこれに関して難色を示している。どう反応すればいいか分からない（優太、宝来、古賀、清水先輩、比留川、真緒）か、呆れ果てている（その他）かのどちらかだ

うん、気持ちはよく分かるよ。だって、だって……

俺が引いたの、キャンデーの包み紙だもん……

神社側が戯れに入れたのか、参拝客の誰かが捨てたのか分からないが、引き当てた俺はこれをどうすればいいんだ？

まあ捨てれば終わる話なんだけど……

俺がキャンデーの包み紙を引き当てたこの結果を納得しなかったみんなが神社側に訴え（俺はもういいと言ったのに）、もう一度引いた結果、今度は胃腸薬の処方箋を引き当てた。マジで何でこんなもんが入ってんの？

で、俺は本当にもういいのにみんなが訴え、あれから48回引き直し、漸くまともなおみくじを引くのに成功した

……マジックで塗り潰されていて、判別が出来なかった。誰だこんな事やったのは

もう疲れたのでみんなを説得して本来の目的である参拝へと向かった

「何でも引かないんだよ瀬上」

「いやだって……俺達の本来の目的は参拝だし、変な所でこれ以上疲弊したくないし」

「まあ本人がいいんなら仕方ない。さっさと参るぞ」

「そうですね……」

俺達は義母さんから賽銭の為の金を貰った。この際義母さんが金の延べ棒を取り出して一本ずつ渡そうとしたが、俺と宝来が必死で止めた

流石に賽銭にそれはギャグだったらしく、必死になっていた俺達を笑い飛ばした後五百円玉を一枚ずつ渡した

賽銭箱に賽銭を投げ入れ、手順をきちんと踏んで願い事をした

「ねえ、みんなはどんな願い事をしたの？」

古賀が尋ねる

「言い合いつこしようよ。あたしは今年は弟か妹が欲しいって願った」

「それは両親に願え」

神様に願う事じゃない

「俺っちは来年こそ箱根駅伝に出る」

室伏先輩、箱根駅伝は大学生です

「僕は、兎に角沢山面白い事が起きると」

松任先輩、願いがアバウト過ぎです

「僕は、素敵なお嫁さんになりたい……かな？」

清水先輩、先輩はお嫁さんになる方じゃなくて貰う方、または婿に行く方です

てかあんた男の自覚はある筈でしょ？神様にギャグを言ったんですか？

「俺は例年通り南極横断だ。初詣はこう祈るのが俺のこだわりだ」

本荘、神様を毎年困らせてんじゃねえ

「僕は世界の人達が僕という絶対的な美しさを持つ存在がいる事を

知り、僕の為に争いを無くして欲しいと・・・」

「三谷、お前も喋らないでくれるか？流石に正月早々殺意を抱きたくない」

ナルシズムを除いたら結構まともな願いなだけに苛立ちは大きいぞ

「私は今年は無病息災でいられますようにと」

「僕は今年は何親が些細な事で喧嘩しませんようにと」

「勝海の願いは比留川のそれと比べて結構深刻だな」

「だって下らない事で仲悪くなって……何時もなら二分で仲直りしてベタバタにくつつくの今回はお母さん実家のある札幌に僕達を連れて帰ろうと……」

「確定事項じゃないから真に受けなくてくれ。そして勝海の今言っただらない理由とやらは聞かないでくれ恥ずかしいから」

勝海、スラツと家庭内事情を口にするもんじゃない

そして比留川夫妻がそうになっている原因は、浮気とかそう言ったもんじゃないな。うん

「私は……カレーの辛口が食べられるようになれますようにと……」

可愛い願いだなお前は

「あたしは仮面ライダーとかヒーロー戦隊とか、ウルトラマンとか
みたいな子供達に尊敬されるヒーローになれますようにと！」

成程、つまりお前はスタントマンになるのが夢なのか

「私は何も無かったから『悩みが出来たら片っ端から解決しやがれ』
と……」

「あんた仮にも教師なんだからさ。何も思い付かなかったんならせ
めて教師らしく『生徒を良い方向に導けますように』とか願えよ」

そんな投げやりなお願いされたら神様は反応に困るだろうしよ

「何でそんな教師みたいな事を初詣で祈らんとならんのだ」

あんた教師だろ

「あたしは長生き出来ますようにと……」

「まだ生きる気があんだ」

「君の子供、つまりあたしの孫の顔を見るまでは死ねないよ」

あんたの場合老衰の孫の死に目に会えそうな気がするよ

「じゃあ後はお兄さんと優太君と瑪瑙ちゃんだけだね。何かある」

「あたしは……高校受験に合格出来ますように……かな？」

頬を人差し指で掻きながら、恥ずかしげに言った

うん、そうだよな宝来、それが普通だよな……

俺は目尻から涙を流した

「僕は……ある目的が、達成出来ますように……」

「何だ優太。お前目的あるのか？」

「まあね」

「俺で手伝える？」

「手伝えないよ。と言うより、『君は』手伝う事は出来ないよ」

「……そ、そうだな……」

優太の何時もと違う様子に気圧され、黙った

まあ優太にだって俺にも喋りたくない秘密の一つや二つはあるだろうし、それを無理矢理聞き出したりするのは野暮だろう。話せられるようになった時話してくればいいし、絶対に話したくない事なら話さなくていい

「あ、ごめん。さっきは酷い事言ったね」

何時もの様子に戻った優太は、手を合わせて俺に許しを乞う

俺は自分の無神経さが優太を逆撫でしてしまったと思っているので逆に謝った

「いやいいよ。それより除夜。君は何を祈ったの？」

「秘密」

俺がそう言つと、全員から不服の声が上がった

「だって俺の願い事はとても分相応とは言えないし。そんな願い事

言っただって俺が恥を掻くだけだし。だから教えない」

ホントかよ。本当は宝来辺りと被っていたから言いたくないだけなんじゃねえのと言い出す周りのみんな

だっ……言えるかよ。こんな事

ずっとみんなと一緒に居たい。

だけどそれは無理だとは分かっているから

せめて……だからせめて……

せめて、来年も、このメンバーで、そしてそれに新しい友達を大勢含めて、初詣に行けますようになって

恥ずかし過ぎてとても言えないよ。こんな、ささやかで、それでいて大それた夢なんか……

「よし、それじゃあみんなあたしの家に行こう！みんなにお年玉あげるー！」

「瀬上のお義母さん。私には？」

「先生にはあげません」

「何処の世界に元教え子の保護者にお年玉ねだる教師がいるんだよ」

俺はみんなと一緒に俺の家へと向かった

おまけ

家に帰った後、義母さんが先生を除いた全員にお年玉として先程見せた延べ棒を一本ずつプレゼントしてくれやがった。何でも俺の中学卒業の前祝いらしい（どうせ当日するんだろっけど）

殆どがこの高価なお年玉に戸惑ったが、清水先輩は

「ありがとうございます。えっと……………」
……………おばさん」

「どうも」

「新しい糠床の重石にピッタリの無かったから……金なら重いし」

金の延べ棒を漬物石の代用？あんたの発想すげえ！

後編 俺の願い事（後書き）

この話は大晦日前に思い付いた話です。予定より時間かかってしまいました

この話で登場したキャラは本編でも登場させるつもりなので楽しみにしてください

では、この話はこれで終わりです。また本編で宜しく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8719p/>

クレヨンしんちゃん&ジョジョの奇妙な冒険 ハリケーンを呼ぶ綱玉の示す路

2011年1月8日23時01分発行